

福山大学生命工学部研究年報創刊 10 周年記念号の刊行にあたって

生命工学部長 秦野 琢之

福山大学生命工学部（平成14年4月開設）は、今年、設立10周年を迎えた。学部としては10歳であるが、その歴史は、本学工学部にわが国初の生物工学科を設置した25年前までさかのぼる。生命工学部誕生の物語は、松浦史登学部長（現副学長）による研究年報創刊号の巻頭言に詳しく述べられている。時の流れは実に速いものである。

学部発足当時は、生物工学科、応用生物科学科および海洋生物工学科の3学科で構成されていたが、平成20年4月、応用生物科学科をライフサイエンス系管理栄養士養成施設の生命栄養科学科へ、また海洋生物工学科を海洋生物科学科へと名称変更し、より幅広い学問分野をカバーする学部へと進化した。名称変更した2学科は、今年完成年度を迎えた。また学部開設の翌年4月には、文部科学省私立大学学術研究高度化推進「ハイテク・リサーチ・センター整備事業」に採択され、福山大学創立30周年記念「グリーンサイエンス研究センター」が設置された。さらに学部附属内海生物資源研究所（マリンバイオセンター）では、水族館や取水設備などの諸設備を充実させてきた。このように学部と両センター、さらには大学院工学研究科生命工学専攻とが一体となって、現在社会が抱えている生物資源、栄養・健康、環境などに係わる課題を解決するための理論、技術、手法に関する研究・教育を推進し、現在に至っている（歴代学部長：松浦史登；平成14～17年度、嶋田拓；同18年度、里内 清；同19～22年度、秦野；同23年度）。

この10年の間に、生命科学は格段に進歩するとともに、多くの成果をあげてきた。ヒトゲノムの完全解読、マイクロアレイ技術の進歩、iPS細胞やES細胞の確立、ナノバイオの台頭など、例を挙げればきりが無い。一方でバイオマスエネルギーの有効利用、遺伝子資源の保護、エマージングウイルスの拡散など、生命科学に課せられた新たな宿題・問題も数多い。特に本年3月11日に発生した東日本大震災を目の当たりにし、我々は自然の偉大さと驚異ならびに科学の成果のあまりのもろさを痛感させられた。自然エネルギーの利用と食糧問題の解決は、生命科学の更なる進歩なくしては成し得ない。生命工学部はまさに生命の不思議を自然から学び、得られた知識・技術・手法を、より快適で持続可能な社会の実現に活用できる人材を輩出するための教育・研究を行っている。この学問分野と本学部で課せられた使命は、ますます重大かつ普遍的なものとなった。

生命工学部では開設以来一貫して「研究を通して、人材を育成し、社会に貢献すること」を目指してきた。研究の成果が大手企業はもとより、地域の企業で実用化された例も少なくない。また技術・手法を教えるだけでなく、基本原理や仕組みを理解し、論理的な思考能力を身につけ、確たる倫理観と強い使命感をもった将来を担う人材を養成することに全力を傾けてきた。10年という節目にあたり、改めて創設時の学部理念を振り返り、かつこの10年間で培ってきたノウハウにもとづく新たな信念をもち、更なる進化を遂げるべく、学部教員が一丸となって進むことをここに誓うものである。

学部の研究成果を広く学内外に公表する目的で、本誌「福山大学生命工学部研究年報」は刊行されている。次の10年に向け、本誌が学術、産業、教育、医療・厚生、行政など各方面の方々と生命工学部との更なる交流に、大きく貢献することを期待する。